世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

龍門石窟の評価

八木春生 [1)]

所属 1)　筑波大学　芸術系

1　はじめに

河南省洛陽市南 12 キロに位置する龍門石窟は、伊水の両岸に長さ 1 キロほどにわたって開かれ、合計 2300 以上の窟や龕が存在している。中国三大石窟のひとつに数えられており、2000 年には世界遺産に登録された。この龍門石窟にはふたつの盛期があり、ひとつは北魏時代後期（494～534 年）、もうひとつは唐時代前期（641～755 年頃）で、唐時代には、全体の 6 割の窟が造営された（注 1)。北魏滅亡（534）以後洛陽は戦乱の地となり、その後長い間造像活動は低調で、仏教治国政策をとった隋文帝や、洛陽を東都に定めやはり仏教を保護した続く煬帝の時代においても、回復の兆しは認められなかった。唐時代に入ってからも「なかなか往時の活気がもどらず」とされるが（注２)、太宗李世民の第 4 子魏王李泰が母文徳皇后を追慕するため、貞観 15 年（641）に賓陽洞再興に着手すると、急速に造営数が増加していった。

北魏時代、唐時代前期のどちらにも 1 窟ずつ、皇帝発願による国家的プロジェクトとして造営された窟が存在し、前者は賓陽洞、後者は奉先寺洞の名称で親しまれている。賓陽洞は宣武帝が亡き父母孝文帝、文昭皇后、そして自らのために開いた石窟で、賓陽南洞、中洞、北洞から構成される（図 1)。しかし中洞（515～517）以外は完成を見ず、525 年頃には造営が放棄され南北洞は未完に終った。後者は高宗が発願し、咸亨三年（672）に則天武后が脂粉銭 2 万貫を助け上元 2 年（675）に竣工した（図 2)。検校として浄土教の大成者である善導が参加したことも知られている。則天武后を模したとも言われる本尊の表情は独特であり、像高 17 メートルに及ぶ大仏でありながら繊細な表現がなされた点で、「東アジアの仏像彫刻の白眉」（注 3）と称されるに相応しい。これら 2 窟が、龍門石窟の中心的な存在であるとして間違いない。しかし研究を進めていくと、賓陽洞、奉先寺洞のどちらも、他地域はもとより、龍門石窟内の造像に対してさえ、さほど強い影響を与えなかったことが知られる。賓陽洞と異なり、造営が完成を見た奉先寺洞の場合、この窟造営以降に本尊が通肩の像が増加することから、奉先寺洞の影響が強かったとの印象を受ける。だが、裳懸座を備えていたと考えられるその下半身形式は､680 年代～700 年代初頭の

図 1 賓陽 3 洞（筆者撮影）

図 2 奉先寺洞
（『中国石窟　龍門石窟』2、文物出版社）

世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

如来像の多くと違っている。奉先寺洞以降に開かれた窟の形式が、奉先寺洞に倣い一新された事実も認められない。つまり現代においてほど、これら龍門石窟を代表する二つの石窟の評価は当時高くなかったと考えられる。そこで本論では、同時期の人々の観点から、これら 2 窟の再評価を試みたい。

2 賓陽中洞

1)石窟の形式

賓陽中洞は、馬蹄形のプランと穹窿形天井を備える。窟高 9、30 メートル、幅 11、40 メートル、奥行き 9、85 メートル（注 4)。天井中央に大蓮華を刻み、雲に乗り楽器などを持った飛天が周囲を飛翔する。蓮池を象った床面には、内側を亀甲文様で飾る通路が中央を走り、一段高いところに置かれた獅子の足下左右にも、泳いでいる童子の姿や水鳥が刻まれる。西壁（正壁）では本尊光背によって一部遮られるものの、南壁（右壁）北壁（左壁）如来立像の頭上には、天上世界との境界を示すように天蓋が刻まれた。開鑿当時、石窟内部は極彩色に彩られていたはずで､内部に入ると非常に広々としていて開放がある(図 3)。宣武帝はおそらく、地上に具現した浄土の様子を窟内部に表そうとしたのだと考えられる。

正壁は、如来坐像を中心に 2 弟子 2 菩薩像を配する 5 尊像形式、左右壁は如来立像及び両脇侍菩薩立像からなる 3 尊像形式が採用される。本尊の足下左右には獅子が 2 頭、斜め向きに腰を落として坐す（図 4、5)。前壁拱門左右はそれぞれ 4 層に分割され、右壁側は維摩像、須大拿太子本生図、皇后礼仏図と 5 体の神王像が、左壁側は上から文殊像、薩多太子本生図、皇帝礼仏図とやはり 5 体の神王像が刻まれた。外壁門口左右には、2 体の金剛力士像が彫り出され（図 6)、拱門の右壁と左壁には、上から飛天、供養者、それぞれ梵天、帝釈天と比定される多面多臂の護法神が見いだされる。

図 3 賓陽中洞内部（筆者撮影）

この窟では、如来像のみならず、菩薩、弟子像などすべての像が、まるで漢民族の伝統的な衣を纏っているかのように袈裟や天衣の纏い方をア

図 4 賓陽中洞本尊および右壁
（『中国石窟　龍門石窟』1、文物出版社）

図 5 賓陽中洞本尊および左壁
（『中国石窟　龍門石窟』1、文物出版社）

世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

レンジする、「像の漢民族化」が完成している。また力士像は胸前に上げた手の掌を正面に向け、京劇役者のように見得をきる、漢民族伝統の威嚇の姿勢を採っている。注目すべきは弟子像の配置方法で、賓陽中洞では、本尊右側に若年（図 7)、左側に老年の弟子像（図 8）が彫り出された。龍門石窟で老若の区別がなされたもっとも早い時期の弟子像は、正始四年（507）銘古陽洞安定王元燮造釈迦像龕であるとされる。だがその時点とでは、若年弟子像と老年弟子像の配置は逆となっている（注 5)。いつこの逆転が起きたかは不明確だが、石松日奈子氏は、龍門石窟古陽洞第 2 層（509～517 年頃）でこの位置の逆転が起きたとする（注 6)。中国では、古くから左を右より上位とした。これは天子が常に南面するとした儒教の思想と関係する（注 7）。その場合、西(陰)より尊ばれた東（陽）は天子にとって左側となるため、右側より左側の方が上位とされたのである。実際漢民族の宗廟における神主の配置法（昭穆制）を考えれば、中央に太祖、第 2、4、6 世（昭）を太祖の左、第 3、5、7 世（穆）を右に配するので、左が上位であるとされたことが確かめられる（注 8)。この漢民族伝統の左を優位とする考え方（崇左の思想）が、弟子像の配置の逆転と関係したに違いない。そしてこの思想に基づく（左に年長、右に若年を配する）像の配置法が採用されたのであれば、下に向けた右手第一指と第二、第三指を伸ばすか（左像)、第一指と第二指のみを伸ばすか（右像）しか造形状の違いを認められないが、左像を過去仏、右像を未来仏（弥勒仏）と考えることが可能である。つまり賓陽中洞は、儒教的伝統（礼制）の中に組み込まれたのであり、それに伴い儀礼方法も変化したはずで、ここに完全な仏教美術の漢民族化が完成したと言うことができるのである。

3 鞏県石窟

賓陽洞とほぼ同時期に、やはり国家事業として造営された石窟に、洛陽故城から東に 44 キロ、洛水の北岸に造営された鞏県石窟がある。胡太后が、亡き宣武帝と自らのために造営したもので、合計 5 窟の中、第 5 窟は第 1 窟から第 4 窟に遅れ荥陽の鄭氏一族によって北魏時代末（530 年代前半）に開かれたことが知られている（注 9)。第 1 窟と第 2 窟は双窟として計画されたが、胡太后が劉騰により 520 年に幽閉されたことから、途中で造営が放棄されてしまっている。それゆえ造営が終了している第 1 窟は、520 年頃には完成していたと考えられる。第 3・4 窟は、胡太后が復活し、再び権力の座に戻った 525 年頃の開窟

左：図 6 賓陽中洞金剛力士像（筆者撮影）
中：図 7 賓陽中洞若年僧像（『中国石窟　龍門石窟』1、文物出版社）
右：図 8 賓陽中洞老年僧像（『中国石窟　龍門石窟』1、文物出版社）

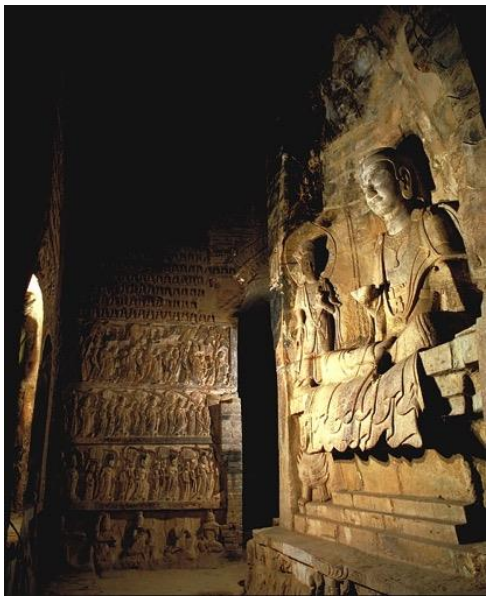
世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

であった可能性が高い。だが河陰の変（528 年）で胡太后が惨殺されたことから、ほぼこの 3 年間に窟が開かれたであろうと思われる（注 10）。

鞏県石窟を代表する第 1 窟は、賓陽中洞とは異なり中央に柱を備える形式の窟（中心塔柱窟）である（図 9）。この窟は開放的な賓陽中洞とは対照的に、昼でも奥壁（北壁）の像を見るには懐中電灯が必要で、胡太后は宣武帝とは違い、墓葬としてこの窟をイメージしたことが窺われる。天井には中心塔柱の向こうの暗がりから、飛天が飛来してくるようにデザインされていて、石窟に入った人間が中心塔柱の奥の神秘的な空間の存在を認識するよう計算されたと感じられる。西域（キジル石窟）では、多くの場合中心塔柱に相対する奥壁に涅槃図が描かれ、敦煌莫高窟でも中心塔柱窟が造られ始めると、白衣如来仏という他の場所には表されない特殊な図像が描き出された。そして鞏県石窟の場合、奥壁最下層には、畏獣像が浮彫りされた（図 10）。畏獣像とは仏教造像でなく、中国に仏教が流入する以前から存在する民間信仰の下級の神で、墓主の遺体を鬼などから守護する役割を担っていた。中心塔柱が造り出す暗がりが、西域では涅槃に関するイメージと結びついたのに対して、中国ではとくに死の部分が強調された。墓葬美術と関係すると言える鞏県石窟の内部装飾は、石窟内部に墓室（霊魂の行き先としての崑崙山のような仙山上の世界に通じる場所）と類似する、中国の民間信仰と結びついた空間が広がることを示している。

近年の夥しい数の発掘や発見、研究の進歩により、510 年代中頃～530 年代に河南北部、山西地方、山東地方など北朝の領域各地で、仏教造像中に烏や蟾蜍を内部に刻んだ日月図など、伝統的に墓葬中に表される漢民族の伝統図像が取り込まれたことが明らかとなっている（図 11）。しかもそれらは地域色が濃く、採用される図像や使用法は、各地で微妙に異なる。崑崙山など中国の伝統的な仙山上の世界のイメージを仏教石窟内部に取り入れた例のひとつとして、敦煌莫高窟第 285 窟天井があげられる。そこには畏獣像をはじめ伏羲、女媧、雷神など中国伝統の神々が飛天とともに飛翔するが、ここに僧侶が修行の結果、兜率天に往生するイメージと、死後霊魂として仙山に昇るイメージとが混交していた様子が伺われる（注 11）。北朝の領域各地で見られる、このような仏教美術と墓葬美術（民間信仰）の融合には、鞏県石窟が一役かっていたとしてよい。

しかし、賓陽中洞のみならず龍門石窟にそれら伝統図像がほとんど見られない事実は、龍門石窟が北朝の中で例外的な存在であったことを示している。そして興味深いのは、北魏滅亡以降、北斉時代に初代皇帝宣文帝が父高歓のために開いたと考えられる北響堂山石窟北洞（550 年頃）が、中心塔柱を持ち、畏獣像が見られるだけでなく（図 12、13）、周壁



左：図 9 鞏県石窟第 1 窟内部（『中国石窟　鞏県石窟』文物出版社）
右：図 10 鞏県石窟第 1 窟畏獣像（『中国石窟　鞏県石窟』文物出版社）

世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

左：図 11 山東地方の日月像（筆者撮影）
中：図 12 北響堂山石窟北洞中心塔柱（東山健吾氏提供）
右：図 13 北響堂山石窟北洞畏獣像（筆者撮影）

を覆う雲文にも鞏県石窟第 1 窟との類似が認められることである。北洞は近年まで「高歓墓洞」と呼ばれ、中心塔柱上層の列龕奥には、文宣帝の父である高歓の柩が置かれたとする言い伝えを持つ穴が存在する（注 12)。それゆえ窟全体のシンボリズムに関しても鞏県石窟の正当な継承者と見なすことが可能である。このことは、北斉時代国家規模の石窟を造営するにあたり、龍門石窟ではなく、鞏県石窟こそが北魏仏教美術の代表であると見なされた可能性を示している。北響堂山石窟の工人たちが目ざした、あるいは参考としたのは、賓陽中洞ではなく鞏県石窟であったのである。

4 奉先寺洞

1)奉先寺洞の概要

奉先寺洞は、西山の中腹を開いてテラスとした場所に開かれた円拱大龕で、平面は馬蹄形（高さ 19、68 メートル、幅 38 メートル、奥行き 36 メートル)。正壁と南北壁にそれぞれ浅い龕を穿つ。正壁龕内に本尊盧舎那仏、脇侍菩薩立像、弟子像の 5 体、南北壁龕内にはそれぞれ正壁側から、供養者像、天王像、力士像の 6 体の合計 11 体が彫り出される。これらはどれも低い二重の基壇上に載り、本尊の部分だけ前方に半円状に突き出している(図 2)。

奉先寺洞には、袈裟を通肩に纏う本尊をはじめ（図 14)、それ以前に龍門石窟唐代窟で流行しなかったいくつかの新たな形式が認められる。そして片膝を曲げて立ち、それと同じ側の腕を上げる天王像に見られる形式などは(図 15)、護腹に獣面を飾る形式とともに、首都西安の最新形式であったと考えられる。奉先寺洞像を彫り出した工人たちによってもたらされたそれら首都様式（西安初唐様式）は、しかしその後、龍門石窟の工人たちにさほど強い影響を与えなかった。

2)龍門石窟における奉先寺洞の影響

奉先寺洞の北には、奉先寺洞の検校のひとりである恵簡によって 673 年に開かれた恵簡洞およびその付近のふたつの石窟（蔡大娘洞、清明寺洞)、そして則天武后と深く関係する宮中の女官、内道場の尼僧たちが 680 年に造営した万仏洞などが存在する（注 13)。これらは、奉先寺洞とほぼ同じ時期の中型窟として有名である。奉先寺洞より若干早いか、ほぼ同時期に造営を開始した蔡大娘洞と清明寺洞には、奉先寺洞からの直接的な影響を看取できない。これら 2 窟の本尊は、661 年に開かれた韓氏洞と共通する形式を持つと同時に、660 年代後半の敬善寺洞からの強い影響が認められる（図 16)。また左脇の窪みに U 字形を縦にいくつか重ねる、龍門石窟では潜渓寺洞や双窰北洞、南洞など 670 年代初頭に出現

世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

した特殊な衣文形式をも備えていた。

一方、恵簡洞（673）や万仏洞（680）には、いくつか奉先寺洞との繋がりを示す形式を指摘できる（図 17、図 18）。両窟とも本尊の頭部地髪部分の表現に奉先寺洞本尊の影響が看取され、恵簡洞では奉先寺洞と同様、南北壁に天王像と力士像が彫り出された可能性が高く、弟子像の形式も類似している。万仏洞も基壇の本尊前方部分が突出し、供養者立像が造られ、さらに天王像が膝を曲げた側の腕を上げる形式を備えていた（図 19、図 20）。だがそれらの類似は、どれも部分的である。そしてこれら 2 窟とも本尊には、蔡大娘洞や清明寺洞で見られた、脇の部分に U 字形を重ねた形式が採用され、基本的にこれらが龍門

図 14 奉先寺洞本尊
（筆者撮影）

図 15 奉先寺洞天王像
（筆者撮影）

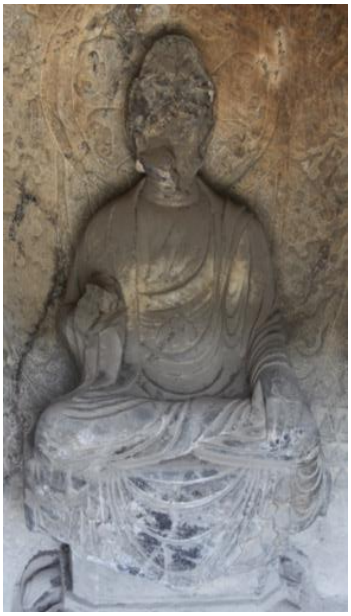


図 16 清明寺洞本尊
（筆者撮影）

図 17 恵簡洞本尊
（筆者撮影）

図 18 万仏洞本尊
（筆者撮影）

世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

石窟造像の系譜上にあったことが理解される。したがって賓陽南洞に始まり、韓氏洞や敬善寺洞など 660 年代初頭から後半に開かれた窟および潜渓寺洞や双窰北洞、南洞などの670 年代初頭造像に継承された諸形式を備えた蔡大娘洞、清明寺洞、恵簡洞、万仏洞は、どれも龍門石窟の自律的な展開上に位置づけられ、奉先寺洞とは系統を異にすることが理解される。

3)奉先寺洞の龍門石窟唐代窟中での位置づけ

660 年代後半開窟の敬善寺洞では、刀の刃を掌に当てる西安で流行したことが知られる形式を持つ天王像が出現し、それ以前に開かれた袁弘績洞（660 年代前半）の転法輪印を結ぶ阿弥陀如来の形式や阿弥陀五十菩薩図も西安よりもたらされたものであった（注 14)。また清明寺洞の、裳に包んだ右足先の形が袈裟の布を通して見える像も 630 年代末にすでに西安で出現している（注 15)。このように奉先寺洞造営以前より、龍門石窟には西安仏教美術の情報が頻繁に伝えられていていた。唐代唯一の勅願窟である奉先寺洞造営に際して導入された形式も、西安の流行形式のひとつとしてしか評価されなかった。つまり奉先寺洞は、はじめに述べた通り、龍門石窟の伝統形式を一新するような大きな影響力を持ち得なかったのである。

奉先寺洞造営に参加した西安の最新の仏教美術を熟知した工人たちは、他地域から呼びよせられたのであり、龍門石窟の伝統を重視しなかった。龍門石窟の造像レベルが西安を凌駕するものではなかったとされたのであろう。しかしその反発で、奉先寺洞以外の窟を開くときには、奉先寺洞造営によりもたらされた新形式は、あまり採用されることがなかった。このことから、奉先寺洞が唐前期を代表する窟であることに間違いないが、龍門石窟内においてこの窟の造像が果たした役割はさほど大きくなかったことが理解される。

5 万仏洞

注目すべきは、蔡大娘洞の真上、地上より 4 メートルほどのところ（注 16）に開かれた万仏洞である。この窟本尊の地髪の側面がふっくらと盛り上がるのは、恵簡洞本尊以上に

図 19 万仏洞天王像
（『中国石窟　龍門石窟』2 文物出版社）

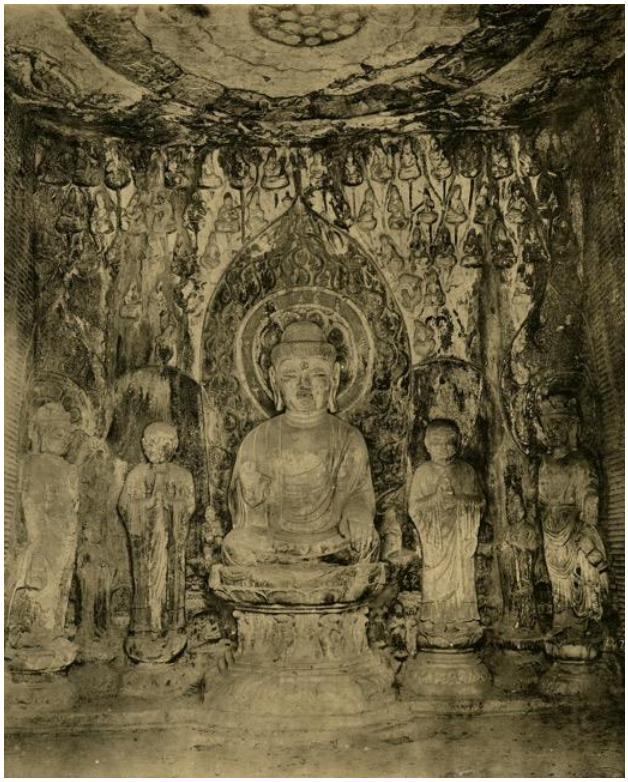


図 20 万仏洞
（『支那文化史蹟』2、法蔵館）

世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

奉先寺洞本尊に近い。だが袈裟は通肩に着けておらず、左腕と身体の間の窪みにU字形の衣文が3本刻まれ、両膝を持ち上げる形式は、蔡大娘洞や清明寺洞本尊との類似を示す。同様に弟子像や脇侍菩薩立像も、龍門石窟唐前期窟における自立的な発展あるいはリバイバルと見なせる諸形式を備えている。南北壁上部中央に彫り出された優填王像は、敬善寺洞区の650年代後半の優填王像と類似し、さらに正壁には同茎蓮華上の52体の供養菩薩図を彫り出したが、これは袁弘績洞のみならず、660年代前半にいくつかの窟で流行したものであった。それゆえ万仏洞こそが、奉先寺洞からの影響と、奉先寺洞で採用されなかった龍門石窟650年代後半～670年代造像形式を組み合わせた、龍門石窟唐前期造像の集大成的な意味合いを持っていたことになる。

図21 奉南洞本尊（筆者撮影）

奉先寺洞のすぐそばに開かれた奉南洞(710年以降)の本尊に、奉先寺洞本尊の影響が認められるものの、U字形というよりV字形を呈す衣文に明らかな違いが認められる（図21)。さらに龍華寺洞（689年以前）のように、通肩に袈裟を纏わない例も存在する。そしてこの時期の脇侍菩薩立像や弟子像、力士像、天王像は、奉先寺洞像との類似点以上に相違点を多く有していた。それゆえ奉先寺洞が龍門石窟初唐窟の代表であることに疑いはないが、造営終了以後（675年以降）も、多くの窟が奉先寺洞によりもたらされたいくつかの新形式だけを採用し、工人たちが奉先寺洞諸像を模倣したということはできない。

6　おわりに

宣武帝の崩御により造営が停滞し、胡太后によって代わりに鞏県石窟が開かれた賓陽洞とは違って、奉先寺洞は光宅元年（684）以来、神都として事実上の首都（注17）としての機能を果たした洛陽において、則天武后が脂粉銭2万貫を助けて造営された。それにもかかわらず、龍門石窟内で圧倒的な影響力を持ち得なかったのは驚きであり、また山東地方や山西地方など他地域においても、奉先洞像との繋がりを指摘できる像は、ほとんど見つけられない。雲岡石窟と鞏県石窟、そして北響堂山石窟を除くと、皇帝の勅願により国家的プロジェクトとして造営された窟は、龍門石窟の賓陽洞と奉先寺洞の2窟しか存在しない。しかも前者では仏教美術の漢民族化が完成し、後者も則天武后の庇護の下、仏教の中心となった洛陽に西安の最新流行形式が導入された点で画期的であったはずである。この2窟を有するというだけで、2000以上の窟が開かれ類い稀なる規模を誇るといった事実を置いても世界遺産として顕彰されるに相応しい。しかし、これらが開かれた当時、現代におけるほどの高い評価は得られていなかった可能性を無視できない。鞏県石窟や万仏洞こそが世界遺産に相応しいというのではなく、当時あるいはその少し後の時代にいかなる影響を与えたかという視点も、仏教美術を評価する上で、私たちは忘れてならないと考える。

注

1、温玉成「龍門唐代窟龕の編年」(『龍門石窟』2、平凡社、1988年)

2、岡田健「龍門石窟初唐造像論—その1　太宗貞観期までの道のりー」81頁（『佛教藝術』第171号、1987年）

3、肥田路美「龍門奉先寺洞盧舎那大仏の造立」215頁（『初唐仏教美術の研究』中央公論美術出版、2011年）

4、劉景龍・楊超傑著『龍門石窟総録』(中国大百科全書出版社、1999年)。以下、窟の

世界遺産学研究 No. 2 (2016)
ISSN 2189-4728

大きさについては、すべて本書の記載に従う。

５、温玉成「龍門北朝期小龕の類型と分期および北朝期石窟の編年」186 頁（龍門文物保管所・北京大学考古系編著『中国石窟　龍門石窟』1、平凡社、1987 年）

６、石松日奈子「龍門石窟古陽洞造像考」40 頁（『佛教藝術』248 号、毎日新聞社、2000 年）

７、「聖人南面而聴天下」（『易、説卦』）や「南面王楽」（『荘子、至楽』）などの記載から、古くから天子は南面するものとされていたことが知られる。

８、昭穆制については、諸橋轍次『大漢和辞典』巻 5（大修館書店、1957 年）を参照した。

９、宿白「洛陽地方における北朝期石窟の初歩的考察」（龍門文物保管所・北京大学考古系編著『中国石窟　龍門石窟』1、平凡社、1987 年）、陳明達「鞏県石窟寺的彫鑿年代及特点」（河南省文化局文物工作隊編『鞏県石窟寺』文物出版社、1963 年）、八木春生「第 4 章　鞏県石窟考」（『中国仏教美術と漢民族化』法蔵館、2004 年）

１０、八木春生「第 4 章　鞏県石窟考」（『中国仏教美術と漢民族化』法蔵館、2004 年）

１１、八木春生「第 3 章　北魏時代後期の仏（道）教造像に見られる漢民族の伝統図像について」（『中国仏教美術と漢民族化』法蔵館、2004 年）、八木春生「第 7 章　敦煌莫高窟第 285 窟壁画に関する一考察」（『中国仏教美術と漢民族化』法蔵館、2004 年）

１２、田村節子「響堂山石窟の現状」51 頁（『佛教藝術』第 153 号、毎日新聞社、1984 年）

１３、曾布川寛「龍門石窟における唐代造像の研究」378 頁（『中国美術の図像と様式』（中央公論美術出版、2006 年）

１４、岡田健「初唐期の転法輪印阿弥陀図像についての研究」（『美術研究』第 373 号、東京国立文化財研究所、2000 年）

１５、岡田健「龍門石窟初唐造像論—その 3　高宗後期」100 頁（『佛教藝術』第 196 号、1991 年）

１６、水野清一・長広敏雄『龍門石窟の研究』32 頁（座右宝、1941 年）

１７、曾布川寛「龍門石窟における唐代造像の研究」369 頁（『中国美術の図像と様式』中央公論美術出版、2006 年）